

# 平成24年度 【 学園研究費助成金<B> 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

フリガナ サガワ ヨシユキ  
氏名 佐川 佳之

研究期間 平成24年度

研究課題名 フリースクール運動における多様性の包摂の構造に関する社会学的研究

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	佐川佳之	人間関係学部	講師
研究分担者			
研究分担者			

### 1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

日本のフリースクールは、不登校が社会問題化して以来、不登校の子どもの居場所として地域における不登校支援を担ってきた。しかし2000年以降、フリースクールは、不登校児のみならず、発達障害やひきこもり、若年無業者など幅広い年齢層と多様な困難を抱える若者を支援する場となっている。本研究では、①多様な若者の包摂を可能にしているフリースクール特有の支援構造、②フリースクールに集う若者のアイデンティティの特徴に関して考察する。これを通じて、フリースクール運動を多様性の包摂の場として再定位し、今日の若者支援におけるその支援の意義を明示化する。

### 2. 研究方法等 (300字程度で記述)

以上の目的を達成するために、具体的に次のような研究を行う。

①フリースクールにおける多様性の包摂の背景について調査研究を行う。この調査研究にあたっては、フリースクール関連資料を収集し、言説分析の手法から2000年以降のフリースクール運動の変容の流れを明らかにする。

②多様な若者を包摂する支援構造と若者のアイデンティティの再構築過程について考察する。ここでは東京都のフリースクールAとフリースクールBの支援者・当事者へのインタビューを行い、この課題を明らかにする。

### 3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

上記のテーマについて、資料収集、および支援現場の参与観察・インタビューを実施した。

まず、フリースクールに関する著書や雑誌記事を収集し、2000年以降のフリースクール運動の変容について分析した。先行研究の多くは主に不登校との関連でフリースクールをとらえている。しかし、この分析の過程で明らかになったのは、2000年以降、フリースクールが不登校のみならず、ひきこもりや若年無業者、発達障害との関連で語られるようになった点である。この流れは、不登校問題の言説がひきこもりやニートの社会問題と関連し、心の問題から自立の問題へと移行していった過程とも呼応する。こうした言説状況からは、多くのフリースクールにおいて、多様な背景と年齢の人びとを受け入れる場になりつつあることが窺える。

以上の言説の検討と並行して、フリースクールの活動の参与観察と支援者のインタビューから得た資料をもとに分析を行った。多様な形で排除され、困難を抱えた人びとを受け入れることについて、支援者は「統合」や「包摂」といった言葉を使って説明する。しかし、こうした多様性の包摂について支援者側における葛藤も存在する。これに関して、調査の過程では、「区別しないで支援する」と「区別して支援する」といった二種類の語りを観察した。この両義的な語りは、人びとを排除することなく、支援することが支援の役割として意識されるが、区別しないことがかえって個々に応じた支援を妨げることを示している。一方で区別して支援することは個々の状態に応じた支援を可能にする反面、それが差別や排除につながるといった指摘もなされていた。ここからは多様性の包摂は自明ではなく、支援者の意識レベルでの葛藤を伴うものだと推察できる。

そうした中で、フリースクール間、専門職などとのネットワーク化を通じて、多様な当事者の支援に対応するために、知識を接合し、実践方法を独自に構築している側面も観察することができた。この多様なエージェントとのネットワーク化がフリースクールのあり方や当事者のアイデンティティにどのように影響をおよぼすのか、今後のテーマとして検討していきたい。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①不登校	②ひきこもり	③若年無業者	④フリースクール
⑤居場所	⑥排除と包摂	⑦支援	⑧

**5. 研究成果及び今後の展望** (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもの数件を記載。)

今回の調査では、①不登校問題の言説と連動する形で、フリースクールをめぐる言説が変化している側面、②現場において、さまざまなエージェントとのネットワーク化による支援の再編成が生じている側面が確認できた。これらについて、さらに分析をすすめて、25年度中に論文にまとめる予定である。

今後の研究として、その再編成の過程と実態について支援の具体的な事例を取り上げて考察する。具体的には、調査で観察できた自然体験活動や音楽を通じた支援、支援者が家庭に向くアウトリーチ支援を取り上げ、それがどのような社会的背景の中で作られていったのか、また当事者のアイデンティティをどのように方向づけるのかといった論点を軸に実施していく。また今回、研究計画にあげた当事者のアイデンティティに関する十分な調査ができなかったが、今回の調査で得た知見を土台に、当事者へのより詳細な調査も並行して展開していきたい。